

夏の女

長谷川時雨

青空文庫

一夏、そのころ在阪の秋江氏から、なるみの浴衣の江戸もよいが、じやうふ上布を着た上方の女の夏姿をよりよしと思ふといふ葉書が来たことがある。ふといま、そのことを思ひだした。

上布には、くつきりした頸えりあし、むつちりした乳房のあたりの豊けさをおもはされる。落附いた御内室ごないぎさんである。なるみの浴衣は洗ひがみの、脊のすらりとした、といつて、お尻に女らしい艶やかさをうしなはない、なで肩を思はせる。前の女は、すこしばかり耳が肉ついてゐても目立たないが、後のは、あんまり大きかつたり、平べつたかつたり、ひつついた貧弱なのだつたりして

は困る。花片の散りたてのやうな清新さが耳になくはならない。鼻には神経が見える女ひとでも、とかく耳は留守のことが多い。生きてゐない。

男の耳はかくされる事がなくて續いて來たせるか生々としてゐる。それが、どんな老爺おぢいさんでも、大きすぎても、厚つべつたくても、顔とおなじ調子に呼吸をしてゐる。まして若い男のは生々と動き働きかける。

耳が動くといふと猫のやうだと、若い少女むすめは笑つてしまふかもしれなが、鬢でかくして來たくせがついて、とかく女の耳は愚圖のろまつたらしい。大切なところであつて、その耳朵は美容にも關係するのに、晩には巻いて寝るリボン一本よりもおろそかにされはし

ないだらうか。

男でも女でも耳朶が赤く匂つて透いて見える時は、その人の容き貌りやうよりも、美しく目をひくことがある。むかしの女は、上布ひとの女でもなるみの浴衣でも、その點におろそかでなかつたやうである。無論足も綺麗に、指の爪もいふまでもなく氣をつけた。

上布を着た女ひとは、あたしの邊ほとりにも澤山ある。それなのに、どうした事かとかく連想は近松の「心中宵庚申よひかうしん」の、八百屋の嫁よ御めごお千代のところへ走つてゆく。お千代ひとりひとりが着たかのやうに

よく思へば、八百屋の嫁御風情が、ふだん着にぞべらとしてゐ

たかどうかさへわからないのだが、お千代の、色の白い、ぽつてりとした、滴るやうな、女盛りの體に、紅の襟うらの透いた紺かたびらは、ほのぐらい店の隅の青物と、行燈の光りとに和して、なまめかしい匂ひがただよつてくる。堅油に艶をだした島田くづし、鼈甲の笄しろたけながに白丈長——そこまでも見えてくると、彼女には、笑ふと絲切り齒が見えて、ちよいと片鬢さへあつたやうに思はれる。柔かい肉附きにうるほひのある、夫半兵衛の目からばかりでなく、此世にはおいてゆきにくい手ざはりを感じさせる。姑の妬氣も、ただそれだけの感觸からだけでもあつたらうとうなづかされもする。

帯のしめかたを、堅くもなくゆるくもなく、崩れさうには見え
ずにコチコチとさせず、褌もゆるやかでありながら、見る目はづ
かしいほどに蹴出しもせず、日傘を斜めにすらりと立つたかたび
らの女、金魚鉢をかきまはさうとする乳のみ子を片手に仰向いて、
話しかけながら鬢の櫛をさしこんでゐる女——かたびらは、古い
風俗繪の大家が、好んで肩、胸、二の腕、腰の丸味を描き現し、
あじあはせてゐる。

紀の國屋源之助が、ひっかけ帯の結びかたがやかましいといふ
ことを聞いたのは、ずっと前のことである。もうかれこれ二十年
も前のことであつたらうか、故左團次の夢の市兵衛の女房をした
時の印象がぼんやりとうかんでくる。紀の國屋の衣裳かたの胸に

針が光つたのを、誰かが咎めたときに、太夫が帯の結びかたがやかましいのでね、といつてゐたやうにおぼえてゐる。源之助のひっかけほどよい恰好なのは見たことがない。男優ゆゑほんものの結びかたよりは、よほど長めでなければ、脊すがらとつろくしない。それがいかにも、解けもせずよい具合に結べてゐる。だらしない感じなぞをすこしも與へずに、いかにもきりりつとした、氣の利いた姿であつた。思へばあの後つきは、帯の結びかたひとつで色氣をもたせてゐたといつてもよいほどであつた。その後、多くのひっかけを舞臺の上で見るが、河合のも、喜多村のも、梅幸のもあれほどにはどうしてもゆかない。梅幸のは上品がつきまといひ、河合、喜多村のには、どうも水ぎはがたたない。それはよん

どころないことかも知れない。上布を着た女の感じを、魅惑的のものとして理想するのと同様に、時代の好みが、ひっかけから遠ざかつてゐるので、意氣好みの女ひとからさへあまり注意されないからであらう。藝妓屋の晝間でも、黒繻子の片側のひっかけよりも、その多くは、細い帯をキチンと結んでゐるやうになつてゐる。

菊次郎も晩年、六代目の相手で世話ものを得意としたゆゑ、ひっかけは下手ではなかつたが、それでもどこか世帯じみた結びかたであつた。

帯の結びかたと半襟の合せかたは、せまいわたしの目の前だけでも、かなり移りかはりを示してゐる。舞臺ひとの女が、老若、時代

にかまはず、無神経に結び目を脊中にくつつけてゐるのを見ると厭になることがある。よく、さほどの役柄でないからとでもおもふ怠りからでもあらうが、仕出しの老おばあさん婆おばあさんが、振りのぶらぶらする、袖の長い着物を着てすましてゐたりするが、往來でも無自覺にめかしてゐる女ひとが多く目につく。身にそぐはぬことを知らぬ女よりも、身にそぐふといふことが、心の目に感じられぬほうが多いのではないかと思ふことさへある。やつて見なければ分らないといふ失敗を、繰返してばかりゐるやうな扮おつくり装おつくりを多く見かける。

生れてから以來、毎日身につけてゐる着物にあべこべに着られてゐるのさへも見かける。

夫に見せてよい姿を、白晝電車の中へ出されては困る。カンレひるまイ紗のゆかたの、腰から下は眞赤で、上は白い小さな肌着の透いて見えるので平氣なやうな流行は、おなじ女性をんなには居たたまれないう氣持がする。着物が透いてゐても却つて暑苦しい。稍それと趣の似たものに、好みの長襦袢の上へ薄羅うすものを着たのは、用ひかたによつて面白いが、それへ羽織を着られると、すつかり嫌なものになつてしまふ。寧ろ、あれは長襦袢でなく、薄羅の下へは、もう一枚、とりあはせのよいものを重ねた方が好ましく思ふ。長襦袢は白無地なり薄色なり、ずつと地質が軽く都合のよい手輕なものにする事が出来る。

あたしの求めてゐる水ぎはだつた姿、すつきりしたおつくりをこのごろでは洋装の女から多く與へられてゐる。簡單素朴な、こゝとそがれるだけそいだ中に、體全體の調和が美を助け、波動が旋律的に傳はつて、清新澆刺なりズムを織りなしてゐる。

着てゐる人の感情が、しつくりと着物とついてゐると、それが若い女ばかりではなく、おばあさん老 婆はおばあさんなりに着物も生きてゐる。きものも鳥の翼はねとおなじやうで、さうなると、ちつとも堅くはない。

日本の着物の中老以上の女ひと——わたしもあゝなるかと思ふと、生きてゐるのが半分つまらなくなる。着物が悪いといふばかりではあるまいが、着物だけの好みからいつても、干物のやうな、燻

製の品物のやうな見かけがする。それを脱けようとする女がもくろんでゐるのは、いやに色つぼくあくどい。要するに、堅い上皮を黒く燻してしまつて、その上をいろどらうとするからをかしくなるのである。燻製の鮭やさんまに裝飾のほどこしやうはないが、男性と女性の區別をよく知つて、（おつくりの上からの事だけを斷つておく）もうちつと上手に取るべき道があつたらうと思ふ。めかすやうで若いものに笑はれるからといふのは不正直だと思ふ。老女にもたしなみがある筈である。そぐはしい装ひを知つてゐるものは、着るといつたからとて二十代の娘の振袖を着はしない。島田にも結ひはしない。だが、死ぬまでも女は女である。燻製になつて、自ら鏡にむかふのも氣持の悪いやうな澁紙面しぶかみづらをつくる

にも及ばない。若い女ひとだとて、やがては通り越してくる道である。
昨日罵つた女の、しておいてくれたことを有難く感じる時がくる。

——大正十一年・週刊朝日——

青空文庫情報

底本：「隨筆 きもの」實業之日本社

1939（昭和14）年10月20日発行

1939（昭和14）年11月7日5版

初出：「週刊朝日」

1922（大正11）年

入力：門田裕志

校正：仙酔^{あびす}

2009年1月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夏の女

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>